

1) マウスを用いたの絶食後の膵臓性消化酵素活性の変動

千葉大学看護学部機能・代謝学講座

○松田たみ子 岩本仁子 田丸雅美 横山淳子  
増田敦子 須永清 石川稔生

栄養は、生命を維持するために不可欠なものであるが、栄養の補給は、通常経口的に取り入れ、消化管内での消化吸収作用を介して行なわれる。しかし、近年経血管栄養補給が可能になり、長期に経口栄養摂取の中止が可能になって来た。そこで、消化管内が使われていない状態が続く場合に消化吸収機能がどのような影響を受けるかについて検討することにした。今回はマウスを用いて、絶食後の膵臓性消化酵素（アミラーゼ、トリプシン、リパーゼ）の、膵臓および小腸内の活性の経時的変動について検討し、以下の知見を得たので報告する。

1) アミラーゼ活性の変動

膵臓、小腸内ともに24時間絶食で著しい減少がみられ、以後は漸減が認められた。

2) トリプシン活性の変動

膵臓では24時間絶食で減少がみられたが、この変化は膵臓アミラーゼ活性程の著しい減少ではなかった。

小腸内の活性は24時間絶食では有意な減少はみられず、48時間絶食で有意な減少が認められ、以後漸減を示したが、著しい減少は認められなかった。

3) リパーゼ活性の変動

膵臓ではアミラーゼ活性と同様、24時間絶食で著しい減少が認められた。

小腸内では、24時間絶食で著しい減少は認められず、以後絶食時間の経過とともに漸減を示した。

2) 中高年齢に達した双生児の研究：血清脂質と生活行動量について

近畿大学医学部公衆衛生学教室

○早川和生

かねてより50才以上の中高年双生児について総合的健康調査を実施しているが、今回、一卵性62組、二卵性13組、合計75組(150名)について血清脂質と生活行動量に関する成績を検討した。本研究は本学臨床病理学教室および中央検査部と共同で行なった。

【方法】対象者全員に当大学への来学を求め、当教室および中央検査部において総合的健康診断を実施した。生活歴、食習慣などについても面接調査した。また、生活行動量の1指標として歩行数を万歩計(YAMASA-AM450)にて連続7日間測定した。

【成績】1)双生児の血清脂質濃度を分散分析し、卵性別に級内相関係数を求めた(Table)。HDLは一卵性ペアで著しく近似する傾向が見られた。2)ペア内で一日歩行数に大きな差のみられた一卵性12組では、歩行数の多いものは少ないものに比して、遊離脂肪酸、トリグリ、β-リポ、アポC<sub>II</sub>、C<sub>III</sub>などで低い平均濃度を示した。

Table  
Intrapair Correlation Coefficient on Plasma Lipids in MZ and DZ Twins

	MZ (62 pairs)	DZ (13 pairs)	
Total cholesterol	0.555	0.328	
HDL cholesterol	0.764	0.191	
Non-HDL cholesterol	0.491	-0.103	
β-lipoprotein	0.383	0.281	
Phospholipid	0.559	0.412	
Free fatty acid	0.004	0.326	
Triglyceride	0.362	0.409	
Blood (fasting)	Apolipoprotein A <sub>I</sub>	0.416	-0.003
	Apolipoprotein A <sub>II</sub>	0.275	0.050
	Apolipoprotein B	0.554	0.070
	Apolipoprotein C <sub>II</sub>	0.406	-0.099
	Apolipoprotein C <sub>III</sub>	0.497	0.062
	Apolipoprotein E	0.437	0.046
Others	Body height	0.951	0.867
	Body weight	0.656	0.667
	Systolic B. P.	0.506	0.176
	Diastolic B. P.	0.546	-0.183

本研究の一部は文部省科学研究費(6057026)及び第1回明治生命厚生事業団研究助成によった。

### 3) 医療場面における言語活動

#### ー第2沈黙時間について

秋田大学付属病院 山本 勝則  
千葉大学看護実践研究指導センター 内海 晃

会話は、多くの生活行動の中で重要な意味を有し、医療場面においてはとくに患者・看護者関係に効果的役割を果たしている。会話は『相互の自己にかかわり合う情報交換』であり、会話それ自体が患者・看護者間におけるスキミングとして医療活動を円滑ならしめている。会話は、したがって言語面・非言語から多くの研究がなされねばならない。

われわれは今回、患者と看護学生との間にかわされた会話を録音し、そのプロセスレコードより、客観的に測定可能な時間的關係での両者の関わり合いを観察した。

第1沈黙時間を相手の発言を聴くために沈黙する時間と定め、さらに両者ともに話していないいわゆる『間』の時間に第1沈黙時間を加えたものを第2沈黙時間と定めた。

第2沈黙時間は第1沈黙時間において生ずる心理的自らの感覚を癒やし、さらに新たな自己の表現にとびこむために必要な時間と考える。

患者と看護学生との間にかわされた会話を発言時間・沈黙時間別に棒グラフで表わし、さらに相互比較のために経時的グラフを用いた。

グラフの分析によって、ほぼ次のような結果を得ることができた。

1. 双方ともに言語活動を行っているが、それぞれ異った時間的経過を辿っていると思われる。
2. したがって、会話は自らがよく話したと考えても、双方同様の効果が生じるとは限らない。
3. 人は相手に発言を許可した時間(第2沈黙時間)と対応した発言時間をとる傾向がある。

次に、対話の効率を測定する数式を検討するために、発言時間と第2沈黙時間との比率より得た数値をグラフ化して、採取した会話の動きを比較してみた。われわれは、医療の場面において沈黙の時間の果たす役割を認め、その数式を定め、得られた数値を山本の会話効率とした。

### 4) 糖尿病患者の看護における理論と実践 弘前大学教育学部看護学科教室

○津島 律、工藤せい子

インスリン皮下注射を長期間にわたって必要とする糖尿病患者の自己注射が昭和56年6月1日より健康保険の適用が制度化され、社会的にも認められるに至った。このようなことから、さらに、医師および看護婦の指導が重要となり、また、社会復帰する患者も増加していくものと考えられる。

インスリン自己注射の指導については、看護における研究例が少なく、指導のために必要な理論的根拠が十分明らかにされていないといえる。そこで、このような主な諸点について研究を行ってきたが、それらは、患者の自己注射における問題点を指導しインスリン皮下注射部位と皮下脂肪層の厚さの測定によるインスリン自己注射の安全性、インスリンバイアルキャップの工夫と細菌学的検討、患者の使用した直後のインスリンバイアゴム栓およびバイアル内の細菌学的検討、インスリン皮下注射のもみ方別による血糖値の変動などである。

看護婦は、主治医の指示のもとで患者および家族に対して指導を行う機会が多いが、このとき、患者の日常生活背景を考慮して具体的な指導を行うことが望まれる。そこで、今回、青森県内の主な総合病院で、糖尿病患者に対する指導機会のある内科病棟および外来の看護婦を対象にして調査を行い、前述の研究結果から導き出された理論と関連づけ看護婦の指導の実際を通して検討を加えた。

5) 老人性白内障手術患者のストレス・適応に関する研究, 手術一年後の状態

(財) 東京都老人総合研究所  
○遠藤千恵子

75歳以上の老人性白内障の発生頻度は高い。こうした老人の健康や生活上のストレス・適応に関する研究は未開拓であり, より適切な看護をする上で重要な課題である。本研究ではこれまでに水晶体摘出手術のため都Y老人専門病院眼科病棟に入院した62歳から95歳の老人患者について, 心理的側面よりストレス水準を, 日本版STAIを用いて測定した。またこうしたストレス・適応状態に影響する要因を分析した。今回はこれら127名を追跡し, 手術一年後の状態を知るため郵送による質問紙調査を実施したのでその結果を報告する。  
〔結果〕

- 1) 老人による手術結果に対する一年後の評価は, 肯定33(45.2%), 中間23(31.5%), および否定17(23.3%)であった。
- 2) 否定評価をした老人群の一年後 state 得点は高く, 肯定群, 中間群に比べ心理的ストレス水準の上昇傾向を示していた(表1)。
- 3) 各老人が認知している白内障と入院手術のそれぞれの程度を高い(重い), 低い(軽い)に分け, その組合せからなる認知別4群と評価別の出現割合から, 否定評価をした老人は, 認知群I, II, IIIそれぞれのおよそ2割であった。(表2)。

表1 一年後評価と State trait の平均得点と標準偏差  
n=60

	State						trait	
	1年後 x̄	S	入院時 x̄	S	手術後 x̄	S	x̄	S
肯定 n=23	29.3	8.5	29.8	11.2	26.0	6.5	30.9	9.4
中間 n=24	33.2	9.7	31.5	12.1	26.3	6.5	30.5	8.4
否定 n=13	45.8	16.8	28.9	5.9	27.2	6.1	25.5	5.9

表2 一年後評価と認知群別出現割合

	I	II	III	IV	計 (%)
	HCG+HSD	LCG+HSD	LCG+LSD	HCG+LSD	
肯定	11	8	3	1	23(38.3)
中間	6	7	7	4	24(40.0)
否定	5	5	3	0	13(21.7)
	22(36.7)	20(33.3)	13(21.7)	5(8.3)	60(100.0)

HCG=Heavy Cataract Grade (自分の白内障が重いと認知)  
HSD=Heavy Surgical Degree (自分の入院手術が重いと認知)  
LCG=Light Cataract Grade (自分の白内障が軽いと認知)  
LSD=Light Surgical Degree (自分の入院手術が軽いと認知)

6) 病院における看護活動解析について

千葉大学工学部 ○川口 孝泰  
富山医科薬科大学附属病院看護部  
境 美代子 出来田 満恵  
千葉県立衛生短期大学 加藤 美智子  
千葉大学看護学部看護実践指導センター  
松岡 淳夫

看護活動における労働作業に関しては種々の時間研究や稼働分析による研究が見られ, 現行の看護体制や所要人員の積算の基礎となってきた。しかし, 看護活動が, 工場労働等の一般工程における時間研究や稼働解析と同じ観点で解析することが出来ないことは, 看護関係者にとり明らかであるにも関わらず, 看護の作業研究において今尚, この域を出ない。

看護が科学的技術活動として看護プロセスによる思考を基として成立していることは, 早くから唱えられてきたことである。看護活動は, この知能活動を把えることにより, 始めてその本質に迫る活動解析が出来ると考える。この事は昨年の本学会総会で述べ, 看護の作業研究の手法を提案した。

今回, 富山医科薬科大学附属病院において, 其の調査手法に基づいて調査を行ない解析を進めており, 活動空間, 作業内容, 作業時の思考内容については本総会一般演題の部において加藤, 境によって詳細を発表する。

ここでは, この活動解析方法の基礎となる考えを述べ, 調査によって得られた資料による作業内容, 思考活動を基に, 看護プロセスにおける思考過程と作業との関連を病棟の診療科別, 重症度等の特性因子と共に検討し, 更にこの手法の妥当性について報告する。

7) 看護現場に於ける看護理論の応用  
(特に POS 利用地域訪問看護)

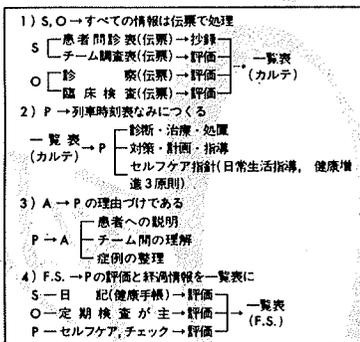
むつ総合病院 看護科 院長  
○上野一恵, 出町ツネ子, 工藤トヨ子, 福島高文

① 現在の看護現場には、対患者、看護婦、管理面で表示の問題点がある。そしてその補完をキーワードで示した。

対象	問題点	補完
対患者	奉仕, 向上, 要請	親切, 円滑, 時間短縮
看護婦	拡大, 多様, 対応	プライマリケア 5 項目
管理面	記録, 分担, 整理	tool, 責任, 監査

② 最近看護現場には PC 6 項目 (健康増進, 予防, 治療, リハ, 社会復帰, 教育) の施行要請がある。PC に関する医学情報 (観察, 分類, 整理) の脱落補完に、私どもは POS を利用している。

③ 私どもの POMR は、S と O とを伝票で操作し、評価要約して 1 枚の一覧表にまとめる。又 FS も同様 1 枚の一覧表にまとめている。



④ 昭和 53 年、保健指導部に来訪また出張処理した人の内訳、人数を表示した。本学会では在宅訪問看護について詳述する。

＜昭和53年 来訪分＞		
区分	内訳	人数
人間ドック	院内	160
	外来	341
健康診断	定期一般	896
	通学、就職	
	運転業務	
労務	チーム	575
集団検診	定期一般	527
	特殊検査	
予防接種	コレラ	188
	インフルエンザ	
来訪分合計		2,787

＜昭和53年 訪問分＞		
区分	内訳	人数
住民検診	東通村	817
在宅患者	訪問	156
職場検診	労務	870
	定期一般	
集団検診	学校検診	2,181
依頼分	(婦人科)	(3,000)
	(学校医)	
訪問分合計		4,024